外来語程度名詞と増加・減少を表す動詞類との共起関係

北京外国語大学・日本学研究センター　戈春暁

現代日本語の外来語の研究において、音韻論的な研究は盛んであるのに対し、形態的・文法的な研究はまれである。現代日本語の外来語研究の課題として、既に日本語に十分に定着している基本的な語に関する分析が遅れている（石野 1996、金 2011）。また、日本語における外来語がどのような文法的性質を獲得し、文中で具体的にどのように使われているのかという文法的側面の分析に関しても、特に研究が手薄な状態にある（茂木、2012）。形態的・文法的な面において、石綿（2001）、服部（2011b、2013）、茂木(2012、2015)、田中(2017)などの総合的な研究では、外来語の品詞性とコロケーションについて触れており、山田（2012）、ビタン・マダリナ(2016)、田川(2018)などは形態統語論的視点から、外来語動詞または外来語動名詞の意味・用法を考察した。つまり、最近の研究としては、外来語の形態構造と文法的性質に焦点を当てている傾向があるといえよう。

本研究はこのような視点を立ち、服部（2011a）と茂木（2012）の研究の続きとして、大規模なコーパスを用いて、これまでほとんど扱われてこなかった外来語名詞と動詞述語の組み合わせについて分析した。具体的には、外来語程度名詞と、「上がる/ 増える/上昇する」「下がる/減る/ 低下する」などのような増加・減少を表す動詞類述語の共起関係に焦点を当て、形式と意味の面から外来語のコロケーションを考察した。

研究の手順として、まず、BCCWJ コーパスを利用して、増加・減少を表す動詞「上がる・下がる・増える・減る・高まる・低まる・高める・低める・増加する・減少する・増やす・減らす・強まる・弱まる・上昇する・低下する」と共起する外来語程度名詞を検索した。調査の結果、増加を表す動詞類と共起する外来語程度名詞の異なり語数は 268 で、減少を表す動詞類と共起する外来語程度名詞の異なり語数は 164 である。ここから、外来語程度名詞は増加を表す動詞類と共起する傾向が強いことがわかった。次に、すべての動詞を合わせた総用例数が 10 以上の語を統計し、BCCWJ における高頻度の外来語程度名詞と

してまとめた。その中、全体的に、増加を表す動詞類と共起しやすい傾向はあるものの、増加・減少を表すいずれの動詞とも共起する語が多いことが見られる。また、複数の動詞と共起する語があることも分かった。続いて、増加を表す動詞類と共起する外来語程度名詞、複数系列の動詞と共起する外来語程度名詞、、外来語程度名詞「ウエート」と共起する動詞について具体的に考察した。

以上が示したように、語彙を収集するだけでも考えなければならない課題が多くて大変だが、豊かな体系を形成するために、外来語程度名詞の研究にはチャレンジする価値が十分にあると思われる。

参考文献：
石野博史（1983）『現代外来語考』大修館書店
石綿敏雄（2001）『外来語の総合的研究』東京堂出版
金愛蘭（2011）「20 世紀後半の新聞語彙における外来語の基本語化」『阪大日本語研究　別冊 3』大阪大学大学院文学研究科日本語学講座
茂木俊伸（2012）「文法的視点からみた外来語−外来語の品詞性とコロケーション−」陣内正敬・田中牧郎・相澤正夫『外来語研究の新展開』: 46-61.
茂木俊伸（2015）「外来語「ピーク」の文型とコロケーション」『語文と教育』(29) :55-45.
田中佑(2017)「外来語名詞「タイプ」の助数詞への進出」『文芸言語研究』(71) :183-201.
服部匡（2011a）「程度的な側面を持つ名詞とそれを量る形容詞類との共起関係 通時的研究 」『言語研究』 140 号：89-116.
服部匡(2011b)「名詞と尺度的形容詞類の共起傾向の推移−国会会議録のデータから−」『同志社女子大学学術研究年報』(62)：113-141.
服部匡(2013)「反義関係に基づいた尺度的形容詞と名詞の共起傾向の分析−国会会議録のデータから−」『総合文化研究所紀要』(30)：104-120.
ビタン・マダリナ(2017)「外来語サ変動詞の自他の計量的分析」『筑波日本語研究』(21)：106-114.
山田進(2012)「「ゲットする」と「タッチする」−外来語動詞の新用法−」『聖心女子大学論叢』(119)：170-147.